

出席委員：萩原委員長 沼野副委員長 深井委員 加嶋委員 西田委員 井上菊信委員 阪口委員 中野委員 吉道委員 近藤委員 井上誠一委員 秋田委員 大西委員

出席職員：前田教育部長 蕨内中央公民館長 大脇浜手地区公民館長 北野山手地区公民館長 稲田中央公民館長補佐

案件

- 1 全国公民館研究集会（鳥取市 10 月 15 日～16 日）について
参加した蕨内館長から概要を報告。

沼野副委員長：全国規模で行われるのは今年で終わりですか。

蕨内館長：そうです。来年からは全国 7 ブロックで行われる大会が全国大会を兼ねるとい形になります。今まで全国大会に使われていた予算も各ブロックに配分されます。ちなみに来年 11 月には全国大会近畿公民館大会が和歌山市で開催されます。

萩原委員長：「次期開催地あいさつ」とあるのは全国大会中国四国地区大会の次期開催地という事ですね。また司会者の肩書が「福山市市民局まつづくり推進部生涯学習課長」とあります。福山市は生涯学習課が教育委員会にないのでですね。

- 2 近畿公民館大会（京都市 長岡京市 11 月 19 日～20 日）について

蕨内館長：参加された皆様、大変お疲れ様でした。大阪府からの参加 81 名 内貝塚から 20 名でした。参加されなかった方にも様子がよくわかっていたように府公連だよりをお配りしています。ここには参加した各公民館からの分科会の報告や全体の様子等を掲載しておりますのでまたお読みください。それでは参加された方からお願いいたします。

第 1 分科会（家庭教育と公民館）

沼野副委員長：奈良市の二名公民館（財団法人が運営）が、文部科学省の委託事業である「地域育ち☆親と子の支援プロジェクト」を昨年 10 月から今年 3 月まで実施したことの報告でした。公民館だけで実施するのではなく、自治会役員や民生委員、青少年指導員など地域の人達で構成される実行委員会をたちあげて行われたことがまず面白いと思いました。対象世代が異なる 3 つの委員会があります。新婚さんや未就園児の保護者や家族を対象とする「パパママにっこり委員会」、幼児や小学校低学年の子の保護者や家族を対象とする「夢・わかば」、小学校高学年から中高生の保護者や家族を対象とする「のぞみ・青少年と親の委員会」の 3 つで、これは「貝塚子育てネットワークの会」に乳幼児部会から中高生部会まで 4 つの部会があることを真似たと発表者の館長さんがおっしゃっていました。それに加え関係団体や専門家からなる評価委員会（ふりかえ

り委員会)があり、3つの委員会からの報告や協力要請に応え、助言や支援をしています。きっちりどどのような成果をあげたかを検証している事がすごい事だと思いました。

最初、にっこり委員会のところでは全然人が集まらなかったけど、映画「生まれる」を上映した時は目標の100人を達成し父親の参加も多かったとか、中高生のところでも人は多くはなかったけど、来た人は悩みを充分出し合えたなどいろいろ苦労話や成果がありますが、これだけのことを成しえたのは二名公民館が地域に根ざした公民館として活動してきたからです。公立中学校の真ん前という立地条件で、学校にいけない子の居場所になっている…促して学校に行かせることもあるけれど、まず話をきいて子どもの抱える問題をみつけ、聞きっぱなしにするのではなく学校にも話をして連携をとって解決にあたるということをしています。公民館ロビーにこたつがあったり、中学生が運営する古本市(収益は募金)や探検コーナーがあったり、子どもや地域の人が来やすい雰囲気になっています。また公民館は料理室があるのが強みで、そこで作ったものをみんなで食べることもできます。まだまだ成功とはいえないと館長さんはおっしゃっていましたが、公民館で地域の人々とともに子どもを育む様子を目の当たりにし、最近がっかりすることが多かっただけに、久々に良かったと思える内容でした。

第2分科会(学校と公民館の協働)

菟内館長：滋賀県の豊郷町社会教育課長からの「通学合宿」の報告でした。豊郷町は人口7,000人余り、江州音頭発祥の地です。子ども達の生きる力を育むため、学校、家庭、行政、地域のボランティアが連携して子ども達を見守っています。子ども達は週に2~3回公民館で寝食をともにし、夕食もいっしょに作ります。学校で行うキャンプなどとは違い、あえて公民館で行うというのはこの地域ぐるみということが重要なのだと思いました。

第3分科会(人権教育の推進と公民館)

大西委員：福知山市立六人部^{むとべ}地域公民館からの報告でした。毎年興味をもってこの分科会に参加していますが、ほとんど毎年「人権は大事です。学ばなければいけません。」といった調子で部落問題をはじめ、さまざまな人権の講座をこれだけ行いましたという話で終わっていると思います。質問も井上委員がされた以外は出なかったので順番にあてていくという状況でした。この「府公連だより」にも「貝塚市から視覚障がい者の方がガイドヘルパーとともに参加されていてすばらしい」とありますが、これはあたりまえのことだし、もっと広い意味の障がい者参加もあるので、こういうことをすばらしいと捉えること自体残念に感じます。ほとんど毎年同じことをされているのではないかと思える内容で、もっと違った視点で取り組

む必要があると思いましたが、一生懸命されている様子で指摘はできませんでした。

井上誠一委員：大西委員と同じ分科会です。参加者は京都、大阪、滋賀、奈良からで、兵庫や和歌山の方もおられたかもしれませんがわかりませんでした。また大阪からも貝塚市、富田林市、大阪狭山市だけで、一言で言えば静かで寂しい分科会でした。京都府福知山市は平成の大合併で一市三町が合併し、人口は8万少しです。地域公民館が中学校区ごとに9館あり、それぞれに嘱託職員の館長と主事、臨時職員の3名が配置されています。

ここは会員制をしいていて地区住民の他にその地域の教師、保育士、行政職員等370名の会員がおります。職員の合言葉として向上心、克己心、団結、自立心が掲げられ、いつでもどこでも誰でもが学べる生涯学習を目的としています。これこそが浅居館長がいうところの人権教育だと思いましたが、実際には公民館の役割として、公民館本来の業務の他に「こころの教育 人権活動実行委員会」事務局や「六人部地区人権教育推進協議会」事務局の仕事を担当しているということです。具体的には社会見学や研修会を行い、ハンセン氏病療養施設である岡山市の長島愛生園を見学したこと、研修会は「こころをみつめ今より豊かに」「ともに幸せを生きるまちづくり」などをテーマとして開催したこと、広報面ではチラシを全戸配布し福知山市のホームページに載せたことなどが報告されましたが、具体的にどんな研修会だったのかがわからない内容でした。市長部局の人権推進室とタイアップしているということはわかりましたが、公民館が人権教育に取り組むうえで、市長部局とどういう線引きでどう担当をわけて、公民館の主体性をもって行っていくのかが示されていないと思いました。

私はその見学や研修会で、さまざまな障がいのある方達の参加がどのように保障されているのかを質問しましたが、広く理解していただくように取り組むとか、バリアフリーをしていくなどの外れた回答しか得られませんでした。誰も発言しないので司会者が一人一人に発言させていましたが、そこから何か提起できるような問題を見つけ議論にもっていくようなこともなく、発言させっぱなしで終わってしまいました。その中でびっくりしたのは宮津市には公民館という施設がなく、公民館の職員が行政の一角にいて、文化施設や学校の施設等を借りて事業を展開していくそうです。それぞれの施設に会場費を払うのですが、予算が不足して思うように活動できないとのことで、公民館という組織、活動拠点がないのでは人権教育以前の問題だと思いました。

沼野副委員長：全国にはいろんな公民館があり、町会費のように公民館費を集め運営しているところもありますね。

井上誠一委員：福知山市もそうでした。

沼野副委員長：今回私が参加した分科会は良かったですが、滋賀で行われたとき(3年前)はテーマから外れた発表だったり、司会者が、助言者は最後の30分で発言していただくと決めて全然助言者にまわさず、質問が全然ないので次々あてていくという状況でした。

井上誠一委員：質問しやすい状況を作らないと駄目ですね。

沼野副委員長：マニュアルどおりに進めているようですが、もっと助言者を活用して議論しやすい状況をつくれれば良いと思います。

第4分科会（青少年の育成と公民館）

加嶋委員：兵庫県香美町の公民館から「ふるさと教育の推進と公民館活動」という発表でした。小学生を対象にふるさとの自然を体験させる中で「この地域が好き。大人になっても住み続けたい」という気持ちを醸成するというねらいの地域密着型の活動です。人手不足のため館長自らが講師を探しに行き自然体験の指導ができる講師を登録し、木工や川釣りなど疑似体験ではなく実体験で行います。安全対策はどうしているのかという質問がでましたが、今のところ規模が小さく、あまりなされていないようでした。貝塚市にも自然はたくさんありますが、ではすぐに実現できるかといえばなかなか難しいでしょうし、せっかくこういう大会に参加しても、貝塚に何を持って帰れるかをつかめず「できたらいいね」で終わるのはもったいないなと思いました。ただ貝塚からは「遊び隊」の活動について中央公民館の永橋職員から報告をしていました。全体的に職員の参加が多く、質問も職員目線の内容でした。市民目線の話をもっとしたかったと思いますが、利用者が多く参加しているのは貝塚だけだったかもしれません。職員も利用者もともに何を学ぶのかという到達点がわかりづらいという印象を持ちました。

第5分科会（高齢者の生きがいと公民館）

中野委員：岸和田の城北公民館から「楽しく学んで、豊かな人生を」というテーマで高齢者大学の取り組み等の発表がありました。その後グループに分かれた時、私の属したグループは岸和田市の人3人、奈良の人1人、私を含めた5人という偏った構成で、お話をきくと岸和田の地区公民館も奈良の公民館も、我々が思う公民館とかなり違っています。公民館がイコール社会福祉協議会のように思える事業内容もあり、こういうところも公民館とよぶのだなと今回初めてわかりました。我々は公民館から地域に出かけていますが、すでに地域の人が運営している高齢者大学もあります。社会福祉が優先されているような印象です。

阪口委員：岸和田市には19の公民館や青少年会館があり、そのうち5つは直営で、14は年間80万の予算で、町会、水防、青年団、福祉、だんじりなどの組織が運営しているそうです。住民票発行などのサービスコーナーがある所も5つあります。発表者の城北公民館館長に対していくつか質問がありました。「男の料理」へ参加する人の動機は？これは、一人になっても生きていけるようにという回答で

した。高齢者大学のテーマをどのようにして決めるか、これは実行委員会を作って決めているそうです。対象は高齢者に絞っているのかという質問には、若い人にもどんどんきてほしいと思っているが実際は女性高齢者以外はあまり集まらないとのこと。グループ討議では、町会でも公民館でも役員のなり手がなくて困っているという話や、公民館では楽しんで学んで心豊かな生活をすればいいのではないか、社会貢献活動はすでに活動されているボランティアさんに任せればよいのでは、という意見が出されました。

北野館長：放課後児童の受け入れをしている公民館もあります。そこでは高齢者が昔遊びを子ども達に教えることで、子どもにとって良い体験となると同時に高齢者にとっても生きがいとなる交流が生まれています。一方、滋賀からは限界集落の人からの発表があり、存続自体が危ぶまれている中深刻な状況が示されました。今後の課題となると思います。

第6分科会（地域の課題解決）

秋田委員：和歌山県かつらぎ町の天野公民館からの発表でした。かつらぎ町は人口18,600人ですが、この地区は特に過疎と高齢化率の高い地区で人口は600人です。文科省からの補助金を受け、廃校になった小学校の校舎、豊かな自然、歴史遺産などを活かして、世界遺産の学習会や山野草図録の作成、芸術鑑賞会、講演会、農業体験等を行い地区外からも結構な数の参加があります。情報発信についてはホームページを作成したとのこと。小学校単位で行っていた事業を小学校がなくなった後公民館が行っているわけですが、学校の事業を行っているわけではなく、もともと小学校があった時から学校の先生に主事の委託をして、地域を盛り上げるため行っていたようです。報告の後、小グループの討論がありましたが私のグループは貝塚の3人(大脇館長、山手の南職員、私)と丹波市市民学習課の職員、「地球環境フォーラム」の人の5人です。いろいろと貝塚の紹介をした後、丹波市の人からは市長部局の組織としてどのようにしていけばよいのかを探るためここに来たという話がありました。

大脇館長：地域にこういう課題があって、それに対してこのように取り組んだという話が聴けるかと思ったのですが、イベントを行い外に向けてアピールするという内容が中心だったので、少し不消化な感じで帰ってきました。その後かつらぎ町のホームページをみて、少子高齢化で町の存続が危ういので、外に向けてかつらぎ町を知ってもらい取り組みに力を入れている事、毎年審査会を行い、町おこしに取り組むグループに補助金を出して移住も含めた大々的な取り組みを行っている事などを知り、その流れの中でのあの発表だったのでなとわかりました。今では30~40代の人が少しずつ移り住んできているようで、外から人が来れば町の人も元気になるでしょうが、地域の高齢者がいきいきと暮らせるための課題解決というテーマからは、ずれた内容だったかもしれません。グループ討議も5人

中3人が貝塚で、中々情報交換に至りませんでした。とりあえず前後の席を合わせてグループを作ったので他のグループも似たような状態ではなかったでしょうか。いろいろな地域の実践をきくために、前もってシャッフルして作っておけばよいと思いました。

萩原委員長：皆さんからの報告で何か質問等がありますか。

藪内館長：大会運営者から貝塚の人の発言が多かったと言われました。

井上誠一委員：いろいろ課題はありますが、大会に参加して良かったと思っています。ただ点字の資料がなかったため大変苦労しました。

ICレコーダーにとったものを後で整理はしましたが、分科会のレジюмеはやはり点字でほしいと思います。テーマが「人権教育の推進と公民館」であるだけに、まずそういうところから示してほしいと思います。レジюмеを点字で打つぐらひは簡単なことです。レジюмеを点字で作らなければならないというところに思いが至っていないという事が問題です。地域に根付かせたげないと人権の問題が空回りしてしまいます。また皆さん、グループ討論について報告されていましたが私の参加したところではありませんでした。こういう事はどこでどのように決めるのですか。

藪内館長：大会運営者の打ち合わせは1日目の午前中に行います。各府県が分科会の発表、司会を担当し、別の分科会にも助言者を出しています。

大脇館長：2年前に人権の分科会の司会を担当しましたが、発表者との打ち合わせは分科会の始まる前のわずか15～20分間でしました。グループワークをするのとしらないのとシナリオのパターンに2種類あり、どちらかを選べるようになっていたと思います。

阪口委員：発表者は単に報告にとどまり問題提起をせず、助言者も助言をしていませんでしたね。

大西委員：皆あてられたらかなりしゃべれるのに、自発的に発言しようとしにくい雰囲気でしたね。

沼野副委員長：第1分科会では休憩時に質問を紙に書いて箱に入れるようになっていて、休憩後再開した時に発表者が回答していました。これまでずっと参加してきて、発表自体の内容や司会者の巧拙にいろいろとバラツキがありました。

萩原委員長：藪内館長（大阪）は来年の和歌山での大会の時は運営を担当されないようですが、今日出た意見や大会時の資料の点訳、手話通訳等についてしっかり引き継がれるようお願いします。

3. 貝塚公民館大会について（平成28年2月13日）

藪内館長：前回お話した時はまだ日程と場所が決まったぐらいの段階でしたが、これまで4回の実行委員会が開催され内容が決まってきました。講師の細山俊男氏（元埼玉県所沢市教委 社会教育主事、大学講師）による基調講演、パネルディスカッション（パネラーは三館の利用者、講座受講者、職員）の後、休憩をはさんで「おしゃべりタイム」という3つから成っています。この「おしゃべりタイム」という

のが重要です。今まであまり知らなかった人とこれからの公民館についてワイワイガヤガヤ話し合う中で見えてくるものがきっとあります。語り合うことが一番です。アドバイザーとして和歌山大学名誉教授の堀内秀雄氏にもお越しいたします。会場には「公民館活動を通して私が気付いたこと、変わったこと」の一言カードなどを事前に作成して展示します。

沼野副委員長：「貝塚公民館は学びの万華鏡」とチラシのタイトルにありますが、これは昨年の大会で長澤先生がおっしゃった言葉ですね。

4 「貝塚市まち・ひと・しごと創生総合戦略」その後の経過報告について

藪内館長：前回の審議会で皆さんに素案について討論していただきましたが、その後広く募集していたパブリックコメントをそこに盛り込み、10月末にできあがったものを国にも報告しております。内容の大きな変化はなく、具体的な行動が盛り込まれております。コメントの中で一番印象に残ったものは、子育て支援も大事だが、そこにまで至らないケース、つまり30～40代の未婚者が多い現状を憂える人が多いという事です。

そういう現状も鑑みて、中央公民館では「オトナの星空交流会」という講座を10月23日に開催しました。20～30代の男女を対象に募集したところ、幼稚園や保育所、学校の先生、消防署員等市の職員などを含む24人が参加しました。公民館も善兵衛ランドも今まで全く知らなかったという若い世代に知っていただくことができましたし、今までにない取り組みで新たな1歩を踏み出せたと思っております。参加者の中にもっとはつきりと「出会いの場」としての設定をしてもらいたかったという声もありましたが、まずはきっかけづくりができたと思っております。次の第2弾として「もちつき交流会」も企画しております。「遊び隊」の協力を得て若い人にもち米を蒸すところから体験していただくというもので、星空交流会でできたきっかけを、さらに交流へと発展させようとしております。「働き女子のよくばり女子会」という講座も三館連携して行っております。おいしいダシの取り方からファイナンシャルプランまで内容は多岐にわたり、若い女性に「貝塚に住み続けよう」という気持ちを持ってもらおうという「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の趣旨に沿うようにいろいろ企画しております。

沼野副委員長：星空交流会は、20～30代の若者を対象にロマンチックな出会いの場を作るということでわかりますが、もちつきは祖父母世代と子どもとの交流という感じを受けるので、ちょっとわかりにくいですね。

萩原委員長：遊び隊と子どもとの交流かと思ってしまうですね。

沼野副委員長：今回はなぜ40代まで広げたのですか。

藪内館長：前回20～30代までにしたら40代の人から問い合わせがありましたし40代の未婚の人も多い現状からそのようにしました。また「もちつき」は継承したい日本文化ですので、若い人に知ってもらいたいという気持ちもこめています。

沼野副委員長：子どもが結婚しなくて困っている親世代に呼びかけると効果的でしょうね。親が行くように勧めることもあるでしょう。

藪内館長：あまり露骨な表現もできませんのでね…

井上誠一委員：ついたもちはその場で食べるのですね。みんなで集まって、きなこやあんこで食べて楽しただけでもいいのではないですか。ここで何を学んだ、何ができたと考えずに。また親から言われても行かないでしょうね。自発的に行くのでなければ意味はないでしょう。こういうイベントをたくさんやれば、自分に合うもの、合わないものを選んでいくと思います。

近藤委員：つき方は遊び隊に教えてもらうのですか。

井上誠一委員：かいどりは難しいですね。

井上菊信委員：全部で2升ぐらいですか。

近藤委員：1臼2升で3臼、全部で6升ぐらいじゃないでしょうか。

萩原委員長：女子会も総合戦略に関わる取組みとして広く広報をしているのですね。

北野館長：前回の審議会で討論した時に、イクメン講座をして若い父親世代に呼びかけるだけではなかなか来ないだろうという話になりました。家族ぐるみで参加できる何か楽しいこともある講座の中で、子育ての責任は父親にも母親にもあるということが浸透していくように、月1回年間10回の5か年計画で、父と子の料理などを盛り込んだ講座を企画しています。

阪口委員：浜手公民館では「パパサロン」という講座をしていますね。

5. その他

映画「みんなの学校」について

藪内館長：「みんなの学校」という映画会を三館の取組みとして3月11日から13日にかけて行います。すべての子どもに居場所がある学校を作りたいという願いのもと、発達障がいのある子ども感情をコントロールできない子どもみんなが同じ教室で学ぶという大阪市住吉区の公立小学校の取組をとりあげた感動的なドキュメント映画です。子どもと教員だけでなく、保護者や地域の人もいっしょになって誰もが通い続ける学校をつくりあげています。

加嶋委員：11月29日に貝塚市PTA協議会でもこの映画を上映しました。保護者や小中学校、幼稚園や保育所の先生など120人が参加し、グループ討論も行われました。学校が変われば地域が変わるというこの取組みについて、みんなが継続して考えていければ良いと思いました。

沼野副委員長：前田部長も参加されましたが、感動されましたか。

前田部長：はい、映画にホロッときましたし、その後の講演会（講師：インクルーシブ（共生）教育研究所所長 堀智晴氏）の中で大変印象に残った言葉があります。「学校の取組みは必ず地域に伝わり、地域社会と連動する」という言葉です。学校が、誰もが通い続けることのできるインクルーシブ教育を行えば、地域でも自分と違う人を特別視することはなくなるということをお話されていたのが大変印象に残りました。